

惣紫

妹と旅を始めて、そろそろ一か月になる。

ガードレールのない道を歩きながら、僕はぼんやりとそんなことを考えた。

季節は冬である。実家を出発した時は快適で涼しい程度だった気温も、今やセーターとダウンを重ね着しなければ体が震える程度の外気に変化していた。さむがっていないかと左隣を見ると、妹は繋いでいる僕の左手を縄のように使った大きなジャンプ歩きをして遊んでいた。楽しそうなその様子に、とりあえず安心する。

「おにいちゃん、まだー？」

「いや、もうすぐ着くよ。いっぱい歩いて偉い」

飛び跳ね歩きで体温が上がったのか、はふはふと息を挙げながら妹が僕にそう問いかける。

つないだ手を離さなくてもいいように一度立ち止まり、妹の頭を撫でながら僕はそう返事をした。均整の取れた妹の相貌が笑顔で柔らかく崩れる。その可愛ら

しさに、僕も思わず口角があがる。再び歩き出すと、本当にすぐ目的地が見えてきた。

今僕と妹が向かっているのは、この地域にある神社である。狛犬ではなく狛兎がいることで有名なその神社に、僕が全国を旅しながら集め回っているもの一つがあるのだ。

しっかりと手を握り直し、僕と妹はとうとう神社の入り口に入った。どうやらこの神社には鳥居はないらしい。それに加え、隣にある公園とほぼ同化しているような造りをしているため、神域に入ったという印象は薄かった。

遠くから子供の笑い声が聞こえる。今日は平日だが小学校は既に終わっている時間帯だ、少し歩いたところにある学校の生徒が遊びに来ているのだろう。声に反応して無意識に妹の表情をうかがうと、妹は声など二の次といった様子であったりをせわしなく観察している。僕の探し物を積極的に見つけようとしてくれているようだった。

僕も妹から目線を外し、ぐるっと神社の敷地内を見渡す。一通り構造を確認すると、そっと目を閉じて探し物の気配を感じることに集中する。

視界を遮ればいろいろなことを感じることが出来るのだ。冬の冷たい風が僕の頬を刺しながら走り抜けていく触覚や、先程から聞こえていた公園の子供たちの声を拾う聴覚が主に鋭くなっている。事実を明確に感じ取れる。数十秒そのままじっとしていると、風に乗ってそっとささやきかけるような呼び声が聞こえてきて、僕はぼっと瞼を開いた。

「みつけた？」

「うん、見つけた。行こうか」

「やった！わたしお友達に会うのたのしみ！次はどんな子かな？」

「どうだろうね」

僕が探し物を見つけたことにいち早く気づき、妹ははしゃぎ始める。僕の探し物のことを、妹は『お友達』と呼んで可愛がっているのだ。僕としてはこういった意思疎通が一方通行の『友達』もどき

よりも同年代の友人を作ってほしいのだが、僕も妹にもその環境は用意されなかったし、この先も許されないということは分かりきっていたので、ありもしない妄想で辛くなる前に思考を打ち切った。

僕の服の袖を引っ張り催促する妹をなだめながら、僕は声の方面へと足を進める。

僕たちが立っていた場所からそう離れていないところ、本当に数歩歩いた茂みの中に、探し物はそっと潜んでいた。

その探し物は、一見すると何の変哲もない石だった。長方形のような縦長の白い石は手のひらほどの大きさで、柱のようにまっすぐ土に突き刺さっている。角は丸みを帯びていて、石の素材自体も滑らかだ。

ただよく見ると奇怪な点が一つあった。僕たちが見ている石の面の反対側、つまり裏面の右下端に、面妖な文様が刻まれているのだ。

ありとあらゆる種類の線と図形と文字の元型を組み合わせたような模様の塊が

全部で四つ、恐ろしく精密に刻まれている。見方によっては、それは文字にも見えた。ただし、どの国の言語でも使われないような形の、という冠詞は欠かせないが。

なんの知識もない人間が見つけたら、その得体の知れなさに本能的に恐怖を抱くだろう。だがその文字を見て、僕はほっと胸をなでおろした。これが目的のものだと確信を得たからだ。

「よかった。間違いないこれだ」

「ほんと？じゃあさわってもいい？」

「もちろん。いつもの通り、僕が名前を言い終わるまで手を離しちゃだめだよ」

「わかった！」

元気のいい返事だ。微笑ましい気持ちになりながら、僕は妹の右手をそっととると、石の文字に触れられた。

小さい手が細かく彫り込まれた凹凸をなぞる。妹の手と石がしつかりと触れ合っていることを確認して、僕はその文字を読み上げた。

「■■■■」

僕の声は空気を震わせて音になる。それは意味を持った言葉としてではなかったが、妙に耳に残る音程をしていた。

下を見ると、妹の手の甲がわずかに肌の色に光っている。その手の下にあるだろう文字が、僕の声に呼応するように僅かに青白い光を放ち始めたのだ。どうやら人の耳には意味不明な雑音でも、‘あちら’には確かに呼びかけの言葉として伝わったらしい。

僅かな光は時間がたつごとに鋭くなるのではなく、柔らかさを保ったままその面積をだんだん広げていく。

妹の指の間から青白い色がこぼれ始めたのを始まりに、光の塊は石すべてを覆いつくすまでその大きさを広げると、突如急速に形を変えた。

「うさぎさん……！おにいちゃん、今度はうさぎさんだよ！！」

「ほんとだ、かわいいね」

そう、光は手のひらほどの大きさの兎に形を変えたのだ。

兎は妹の手のひらにすくと降り立つと、腕を伝って頭まで軽々と駆けていく。妹はくすぐったかったのか、小さく笑いながら頭上の上の兎と戯れていた。僕はその楽しそうな様子を見守りながら、済ませなくてはいけない事項を素早くこなす。

周囲に『探し物』をしている人はいないかを確認しなくてはいけないのだ。今のところそれらしい人影は感じない。どうやら回収は安全に、誰にも見つからず済んだらしい。安堵に心を撫でおろすと、不意に服の袖口が引っ張られて

いることに気が付いた。引っ張っているのは、先程まで妹とじやれついていたはずの兎だった。先ほどの光を思わせる青白い瞳が、まっすぐ僕を見つめている。視線を交わした瞬間、

僕はこの兎の形をしたものが何を求めているのかはつきりと理解した。妹はどこか寂しそうに兎を見ている。兎が僕に興味を示し始めたことが悲しいのだろう。未だに僕の袖をかじっている

兎を持ち上げると、僕は妹の手の上にすっと兎を置いた。

そして、その青白い瞳をじっと見つめて言う。

「僕ではないよ。」

言葉が通じたのか、それともただの偶然なのか、兎は意外にも僕の意思をくみ取ったようだった。僕へと向けていた視線をふいと逸らすと、先程と同じように妹と戯れ始める。妹の顔に笑顔が戻っていった。これでひとまず安心だ、とほっと息をつく。

しばらく妹と兎は遊んでいた。そして何の前触れもなく初めの青白い光に変化すると、そうすることが自然なことのように、兎だった光は妹の心臓あたりへと吸い込まれるように消えていった。

「きえちゃった。おわかれて早いね」

「また会えるよ、だから大丈夫。さ、お昼食べに行こう」

「うん……」

光が消えていった胸のあたりをさすりながら、妹が悲しそうにつぶやく。元気

づけるためにまた会えると慰めながら、僕は妹の手を引いて神社を後にした。

この旅が始まったきっかけは僕だった。

僕は一般的な家庭とは違う、特殊な仕事を生業としている家に生まれた。その生業は“ウラ遣い”と呼ばれるものだった。

現実、つまりこの世のことを、僕の家では“オモテ”と呼ぶ。そして反対に、この世を住処とせず、はつきりと知覚できないあちら側に存在する何かを、ウラと呼んでいる。

ウラの存在を初めて人が認識したのは、今から千年以上も前のことらしい。当時はこの世とあちらの境目が薄く、たくさんのウラがこの世に来ては去り、来ては去りといった状態だったそうだ。

はじめは姿形も異形のそれだったそうだが、いつしか彼らはオモテの人間が親しみやすい姿形を模す様になった。可愛らしい動物だったり、絵に描かれた絶世

の美女だったり、だ。それに伴って、オモテの人間側にも変化が訪れるようになった。

ウラ達を愛し始めたのだ。

彼らが人にとって親しみやすい姿だったことがきっかけだろう、人が人に抱くような淡い親愛感情が芽生えたのはごく自然な現象だと言えた。だが異常なことに、時間が経ち世紀が過ぎていく間で、人間たちがウラへ向ける感情はとてつもなく深くて重い感情へと変化していった。

いつしかオモテの人間たちは、自らの家族や友人よりもウラの方を優先し、いつくしむようになっていった。

そうして生まれたのが“ウラ遣い”という生業だった。愛するウラとずっと共にいるために、彼らを縛り付ける術を編み出した一人の男が開祖だ。彼はウラが住むあちら側とこの世との間に固定の扉を作り、その扉ごとウラと契約することで、彼らをずっとこの世にとどめておくことに成功したのだそうだ。

ウラ遣いは複数のウラと契約できるが、その逆は不可能だ。そのため昔から、ウラの奪い合いは絶えなかった。こういった争いで被害を被った一族もある。ウラを現世に縛り付けるための扉が際限なく作られたせいで、酷使された扉士たちの血筋が途絶えてしまったのがいい例だ。

扉士たちの能力は特殊で、血縁により授けられる類のものだった。そのため、それからウラ遣いたちは扉を増やすことが出来なくなってしまうた。

ウラ遣いとは別の一族を滅びに追いやったことで多少冷静さを取り戻したのか、彼らは争いが外に漏れないように家の仕組みを変化させることに決めた。そうして出来上がった一族制度が、今まで続いているものだ。

ウラと契約した者を筆頭にいくつかの集団に分かれ、それぞれ家を作る。そして、他家のウラとの契約に介入しないように、各家はウラの扉を全国様々な所に隠し、ウラとの契約をその家の当主の

み許された特権という扱いとした。こうして、ウラ遣いの家を継いだ当主は代替わりの際にその封印を解除する権利を与えられるのだ。

今有力な家は、大君家、京極家、紅梅家などだ。他にもウラ遣いの家系は沢山あるが、群を抜いているのはこの三家だった。そして約一か月前、三大有力家の一つ、大君家先代当主が病によりその生涯を終えた。次代の選出が速やかに行われ、そうして、僕と妹はウラの契約を解除する旅に出ることになったのである。

兎の形をしたウラと契約してから数時間後。先程まで明るかった外はすっかり日が暮れ、藍色に染まった空にいくつか星が見え始めている。その様子を今日泊まる旅館の机でお茶を飲みながら、僕はぼんやりと見つめていた。

手に持った湯呑に入っている緑茶の水面が揺れる。呑み始めた時は綺麗に浮かんでいた茶柱はバランスを崩したのか、湯呑の底で力なく横たわっていた。

机から離れたところでは、疲れた妹が既に布団の中で眠っている。まだ風呂も入っていないし、食事もしていないのだが、我慢させるのも可哀想だったのだ。よく寝ている妹を見ながら、僕はこれからのことを漠然と考える。

僕と妹の実家である大君家は、“ウラ遣い”の一族の中で最も高い位置に存在している。頂点たる三家にも序列があるのだ。その位は単純に、大君の当主が継ぐウラの扉の数が最も多いという理由によるものである。総数十扉、僕と妹が今日回収したあの兎の形をしたウラは、そのうち九つ目だった。

つまり、回収が必要なウラはあと一つということだ。その回収をいつ行うか、僕は迷っていた。

契約による回収に不安はない。僕も妹も実力は見誤っていないからだ。だが気がかりなのは、この契約をしてみれば旅が終わってしまうということだった。

ウラ遣いとして色々な能力を磨く忙しい日々から解放された旅はとても素晴らしいものだった。僕にとって正真正銘の救いだったし、妹にとってもそうだったと信じていた。

だがすべての契約を終え、当主としての認知に必要である『儀式』をこなさなくては、大君家の総括は宙に浮くことになる。当主が決まってしまった今、僕の願いだけで旅を先延ばしすることは大君家のウラ遣いたちにとって最大の侮辱だ。それだけはできない。

旅を続けたい気持ちと、当主の座の重さ。天秤にかけながら慎重に考えて、僕はどうとう覚悟を決めた。

九つ目のウラを回収してから一週間後。とうとう僕と妹は最後のウラを回収するため、鉄道に乗って移動していた。

これまで回収してきたウラ達は、そのどれもが辺鄙な場所か、目立たない住宅街の一角にあった。だが最後のウラは少々特殊な事情が絡んだ結果、人が立ち入らない山奥に扉が設置されている。登山まがいの運動を強要される点と、その

特殊な事情への対策を求められる点において、最後のウラの回収には色々な準備と、それを為すための時間が必要となっていた。

この一週間、それなりに動いたことによる疲れを、鉄道の座席に座りながらじんわりと感じ取る。

目を閉じると一気に疲労が押し寄せてくるような感覚になったが、隣の席に座って窓の外を眺めている妹の手を握ると、その疲れも癒されていくような気がした。

「眠くない？大丈夫？」

「だいじょうぶ。見てお兄ちゃん、すぐきれいだよ」

ここ数日、寝食を十分にとっていた妹は元気が溢れているようだ。電車特有の心地よい揺れに眠気を引き起こされる様子もなく、熱心に外の景色を見つめている。

十数分もすれば目的の駅に着くため僕も本格的に眠る気にはなれず、襲ってくる

る睡魔を無理やり引きはがして景色へと目線をやった。

初冬だからだろうか、うっすらと白い帽子をかぶっている山がいくつも佇んでいる。山に住まう木々が豊かな深緑を湛える様子は、真昼の澄んだ空の色彩と綺麗に合わさり見るものを圧倒する神々しさを放っている。

妹が惹かれるのも納得の、荘厳たる景色だ。家業の一端とは言え、この場所に来られたことを僕は純粋に喜び始めた。

窓に視線を向けていると、あつという間に車内のアナウンスが僕たちの降りる駅への到着を告げた。

旅を経て多くなった荷物を持ちながら、多少もたつきつつも無事に鉄道を降りる。妹もその背丈にふさわしい小さなスーツケースを一生懸命運んでいた。

その様子をしっかりと見守ってから、僕はこの旅の最中、ずっとそうしてきたように、しっかりと妹の手を握り改札へと向かう。

「これからお宿にいくの？」

「いや、今日はどこにも泊まらないんだ。今日のうちにウラ……お友達の回収に行くからね。」

「あたらしいお友達！またあえるね！！」

「そうだよ、また会える。きっと気に入るよ」

これまでのように目を輝かせる妹の顔を見て、この表情も今日で見納めだと寂しい気持ち心がよぎった。取り繕った笑顔が崩れそうになるのを辛うじて抑え、切り替えるためにこれからの流れを妹に言葉で説明する。

「回収する前に、おにいちちゃんの知り合いのお店に行くんだ。荷物は運ぶのが大変だから、駅のロッカーに預けよう。」

「うん！」

笑顔で返事をした妹が、改札の外にあるロッカーへとまっすぐかけていく。妹が着ている白いワンピースの裾が大きく揺れた。ベルトでうまくたくし上げられているが、風に吹かれると、その小さい

体に到底見合わないサイズであることが
なんとなく感じられるようだった。

荷物をほぼロッカーに預けた後、僕と
妹は回収に必要な物資を調達する為ある
場所に向かっていた。

緩やかだが長い上り坂を歩いて数十分
経つと、目の前に目的の建物が見えてき
た。

平凡な事務所然とした建物だ。入り口
の近くにある窓には『一臣雑貨店』とい
う文字がありきたりな字体でプリントさ
れている。目立たないという一点に特化
しているような店だった。

僕は妹の手を引きながら、迷わず店の
扉を開ける。中にいた店主が、扉のベル
の音に反応してこちらに顔を向けた。店
主は大体四十代程度の男だ。頭は坊主
で、銀細測の丸眼鏡をかけている。店と
同じように、この店主も特色を排除した
ような雰囲気醸し出していた。

来店した僕と妹を見て、店主は眼鏡の
奥の瞳を大きく見開いた。だが瞬時に穏
やかなほほえみに表情を切り替えると、

立ち上がって奥からレジカウンター近く
にゆつたりとやってくる。

「いらっしやいませ、大君の新しい当主
様。何かご入用ですか？」

「耳が早いですね。もう当主の顔が伝わ
っているとは……」

「私達、一臣家は
大君の方々のつながり
が深いですからね。これくらいは当たり
前というものです。」

変わらぬ穏やかな笑顔で、店主が手際
よくお茶を淹れている。どうぞ、と差し
出されたその好意に素直に甘えて、僕と
妹はレジカウンターの奥に足を踏み入れ
た。

「どうとう『冠』の儀式ですか。いや
や、当代はとても優秀なようだ。もうす
べての回収を済ませてしまわれるとは。
記録にある歴代の当主様方より早いご到
着であらせられます。」

火傷しないよう僕が冷ました日本茶を
ゆっくり飲む妹の様子を見ながら、感慨
深いといった風に店主が言った。

誉め言葉は受け取るとして、回収につ
いては実際の所、店主は少し勘違いをし
ている。

「いや、実は今代は、最後のウラも回収
するつもりでした」

「……それは、なんと」

僕たちが店の扉をくぐったときよりも
驚愕しているのか、目が思い切り見開か
れている。

説明を待っているのだろう、店主はそ
のまま黙っていたので、僕は勝手に話し
始めた。

「それが、先代の遺言に含まれていたん
です。先代は契約が可能だと判断したの
でしょう。あのウラと契約しなければ、
今代として認められない。」

そう、十個目のウラと大君家の当主が
契約したのは、年月で言えば三百年も
前が最後の例なのだ。

ウラ遣いが優秀と言われる所以、それ
はひとえに、ウラ達に愛されることのみ
にある。

基本的にウラはこの世に執着しない。だがこの世の人間が、全てを投げ出すような深い愛をウラに向ければ、彼らはこの世にとどまる契約に応じてくれるのだ。

だがウラにとって大した愛ではないと認識されれば、彼らは契約に応じない。十個目のウラは特に頑固者で難攻不落と呼ばれた存在であり、歴代当主はそのほとんどが九つ目までの契約で、当主となるために行われる『冠』の儀式に至っているということが現状だった。

「中々に厳しい条件ですな。いや、当主様の力量を疑っているわけではございませんが……」

「あまり言うべきではないでしょうけど、僕もそう思います。」

何とか返事をしたという様子の店主に、僕は肯定を返す。そして姿勢を正し、本題に入った。

「そういうわけなので、拘束具が必要なんです。一臣家なら良質なものを製造す

ることが出来る。おそらくあのウラも抑え込むことが出来るでしょう。」

「かしこまりました。丁度、長年かけて作り上げてきた一品がございます。お待ちいたしますので、少々お待ちを。」

真つすぐ店主の目を見て、僕は言った。店主も僕がどれほど本気かということとを察したのだろう。迷いなく立ち上がり、倉庫らしき場所へと歩いて行く。

店主はウラ遣いではないが、その系列に含まれる家の出身だ。歴代とは異なる道を選び今代の大君当主について聞きたいことも多くあるだろうが、それを抑えて仕事をこなす姿に、僕は尊敬の念を覚えた。

「お兄ちゃん、まだ？」

「うん、ちょっとかかるかな。ごめんね」

店主がいなくなつて緊張が解けたのだろう、今までお茶を眺めながらおとなしくしていた妹が身じろぎ始めた。あと少しで終わるからとその小さい頭を撫でな

がら宥めていると、早くも何やら大きな箱を持った店主が戻ってくる。

「お待たせしました。こちらです。」

店主が机に箱を置く。中に入っていたのは、成人男性の胴回りほどある大きな金属製の輪だった。丁度僕の胸囲くらいだろうか、蛍光灯の光に反射して、銀の輪が鈍く光っている。よく表面を見ると、僕の手の平ほどもある翡翠色の石がはめ込まれていた。

「こちらの大きい輪が、ウラを抑え込むためのものです。そしてこの輪は、こちらの指輪と連動しています。」

「連動？」

店主が差し出したのは、大きい輪と全く同じデザインの、色違いの指輪だった。

はめ込まれている石も、大きさこそ違いますが変わらず美しい翡翠の輝きを称えている。

「こちらの指輪は、ウラの主、即ち当主様のためのものです。簡単に仕組みを説明いたします。」

そういつて店主は説明を始めた。そもそも拘束具とは、自分の力量に及ばないウラと契約するためのものである。大きな輪をウラに装着し、指輪をウラ遣いはめることで双方に疑似的な絆が生まれ、そうしてウラ遣いに足りないウラからの愛を補強することが出来るのだそうだ。

「昔はよく使われていたのですが、最近で購入されることなど殆どありませんでした。これは最後の一つと言っても過言ではありません。」

「最近のウラ遣いは道具を使うことを恥だと考える傾向にありますからね。僕としてはくだらないと思うんですけど」

どこか感傷をはらんだ声色で、店主が輪を見つめながらつぶやく。それにつられたのか、僕もふと実家のウラ遣いたちのことを思い出していった。

「……お聞きしてもよろしいでしょうか。」

「どうぞぞ」

しんみりした雰囲気にはふさわしい口調で、静かに店主が伺いを立てる。とうとうこの時が来たか、と僕は心の中で自嘲の笑みを浮かべた。

「どうして妹君をご当主にされたのですか。あなたほどの優秀なウラ遣いであれば、こんな拘束具など使わずともウラの回収は容易なはずです。」

分かっていた質問だったが、面と向かって言われたことに少なからず衝撃を受け、僕は言葉に詰まる。どう切り出せばいいか分からない。混乱しているのか、僕の頭は店主への返答ではなく、今までの人生、ウラ遣いとしての記憶を呼び起こし始めていた。

そう、僕は恐らく、全てのウラ遣いの頂点に立つことが容易なほど優秀なウラ遣いだった。

『ウラ遣いには、ウラだけを愛し、慈しむ者がふさわしいのだ。』

大君家に生まれ、ウラを見ることが出来る能力を持つ子供は、全員幼い頃からそういう教育を受けていく。普通の子供のように学校に行くことは許されず、外出も許可制度の閉鎖的な空間で、ただひたすらウラに愛されるためだけに、彼らを愛する技術を磨く。

その教育は半ば洗脳に近いものだった。だが完全に思考回路を支配されるわけではない。それなのに、長い歴史の中でウラ遣いの子供たちから出奔者が出たことは一度もなかった。

理由は単純だ。子供たちは成長と共に、自然とウラを心から愛するようになるからである。

外に出たいという誘惑があった。自由に生きたいという欲望があった。だがそれらすべてを切り捨ててもあまりある感情を、まだ精神的に幼いはずの、ウラ遣いの卵たちは抱くのだ。

きつかけも理由もなく、ただウラ遣いとして修行していくうちに自然とそうやっていく。

その代償と言えはいいのだろうか、ウラ遣いはウラに対して巨大な愛を持っていても、その情を一切人に向けることは決してない。

契約できるのは当主だけというだけで、契約できずとも周囲にいるウラとは触れ合うことが出来る。そのため大人になり当主を選ばれなくとも、彼らの愛は行き場を失わない。

たとえ子供を産んだとしても、血のつながった兄弟がいたとしても、そこに何の感情も抱かない。それがウラ遣いとして正常で、模範とされる姿勢だ。

だから、人との関わりや温もりへの欲求を失わなかった僕は、とても異端な存在だった。

よりにもよって、人への感情を抱いているままなのに、異常なほどウラから好かれたのだ。体質なのだろうか、大した修行もしていないのにウラ達は勝手に集まってくる。その青白い瞳を僕に向け、足や腕にすり寄る。

そうして年齢問わず大勢のウラ遣いから妬ましく思われていた僕は、精神的にも追い詰められていた。

僕はずっと、誰かと話がしたかった。生みの母親に存在を忘れられ、修行やウラとのふれあいで忙しい従兄妹や異母兄弟達に無視され続けても、その願いは決して失われなかった。

でもあの時はさすがに疲れてしまっていて、生きること自体に諦めを見出すようになっていた。その時、小さな、本当に小さな手が僕の指を握った。それだけのことだったが、僕はこれから先の生きる意味を見つけたのだった。

頭の中で、かつての記憶がよみがえっている。過去の整理と回答の言葉を選ぶうちに暫く黙り込んでしまったが、店主は静かに待ち続けてくれていた。

「妹に、死んでほしくありませんでした。」

「ウラ遣いのあなたが、人に情を向けているのですか？いえ、思い返せばあなた

は、来店された時から私に対してとても丁寧に接してくださっていた……」

呆然とした顔で店主が言う。僕はそれには返事を返さず、ただ自分の想いを整理するためだけに話を続けた。

「大君家の当主争いは、今代に限って殺し合いでした。おそらく僕を殺そうとしたのでしょね。」

本来なら、当主はウラによって選ばれる。部屋の中に当主候補を集め、一番ウラに好かれた人間が当主となるのだ。血を流す争いは全く必要ないはずだった。

だが今代は明らかに結果が分かっている。だから、人にうつつを抜かず失格者が選ばれないために、殺し合いになってしまったのだ。

僕は誰も殺したくなかった。大切に思っている親族たちを、家族を傷つけたくなかった。

だけど、自分の一番大事なものを優先すると決めた時点で、そんな世迷言は口すら出せなくなっていた。

「とても熾烈な戦いだつたと聞きまして。そうでしたか、そのようなことが……」

「今でも思い出します。最近、夢見が悪くて」

顔面蒼白の一步手前のような表情をしている店主を安心させるように僕は微笑む。

店主はウラ遣いではないし、左の薬指が家族を持つていることも教えてくれている。

恐らく、僕の境遇に相当共感してくれているのだろう。同情でも哀れみでも、僕にその気持ちに向けてくれているという事実が今はとても嬉しかった。

僕は固まっている店主をよそに代金を置き、唯一持ってきた空のリュックサックに大きい輪を積み込む。そして、指輪を手に取りそつと妹の指にはめた。

妹はただならぬ空気を理解できていないのか、きよんとした顔をしている。

だが指輪の美しさに気を取られたのか、すぐに笑顔になって自分の手を眺めていた。

出立の準備が済むと、僕は店主に向き直り、礼を言った。

「ありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ。どうかご武運を」

感情を押し殺して辛うじて絞り出したような見送りの言葉に、笑顔を返す。

そして、僕と妹は最後のウラを回収するため、店を出た。

店から最終目的地までの行先はもつと山奥だが、車などの交通手段は一切使用しないまま、僕と妹は歩いてきた。下手に音や振動が出る移動手段を使うと帰りが面倒になるからだ。体力的にきつくはなるだろうが、ここが正念場だと僕は十分理解できていた。

妹にとっては多少厳しい道のりになるだろうが、疲れて眠くなったとしても僕が背負えばいいだけだ。妹にそれほど負担はかからないだろう。

現在時刻はまだ午前十時だ。だが今日の朝早めに起きたこと、先程まで暖かい場所でお茶を飲んでいたためか、早くも妹は眠気を感じている表情をしている。それでも冬特有のはつと目が覚めるような空気と、吐くたびに白くなる息に気を引かれているおかげで、今すぐ動けなくなると言ったことにはならなそうだった。

今日やらなくてはならないことは、最後の回収と、『冠の儀式』だ。

『冠の儀式』は、大君家の当主となるために必要不可欠な行為である。最後のウラと同じ場所に設置されている石の祠に、古代から受け継がれてきた大君家の冠が保管されているのだ。歴代当主は最後のウラを起こさないように祠までたどり着き、冠に触れることで当主たる資格を得た。最後の回収が出来ない力不足は、祠まで十番目のウラに気付かれずにとどりに着くことが出来たという事実で、帳消しになるというわけだ。

今回は最後の回収を行うつもりのため、ウラを隠すために張り巡らされている結果を気にせず堂々と入ることが出来る。回収は面倒ではあるが、隠れなくていいという点は楽だと言えた。

ずっと歩いていくと、やがて駐車場と共に小さなロッジが見えてきた。そこで車道は途絶えている。ここからが本番だった。

ロッジの傍まで歩くと、ちょうど後ろに草に紛れた石造りの階段が設置されているのが見える。ちょうど眠くなり始めた妹を背に抱えて、僕はその階段をゆっくり上り始めた。ロッジまでは一時間ほど。だがこの階段を上る時間は甘く見積もっても三時間だ。争いのために鍛えてきた僕には全く問題なくとも、今の妹には少々堪えるだろう。早めに眠ってくれて助かったと僕は胸をなでおろす。

長い時間を動かし、どうにかこうにか階段を上りきる。そこは簡易的な広場のようになっていた。

もっとも整備されているわけではなく、草は生え放題だ。だが木は伐採されていて、円形に草原が広がっている。今の時間はちょうど十六時だった。まだ太陽が明るい、真冬のため、早くしないと日が暮れ始めてしまう。

僕が足を踏み入れると、膝あたりまで生えている草が一斉に揺れ始めた。風は吹いていないのに。おそらく境界内に立ち入ったからだろう。腕の妹も何かを感じ取ったのか、小さく動き、ゆっくりと目を開ける。お兄ちゃん、と呼ばれて、僕は安心させるように穏やかな笑みを返した。

草の動きは激しくなっている。さわさわという音が揺れの激しさに同調してざわざわとした音に変化していくのと同時に、あたりを満たす気配にも明らかに変化が見え始めた。

境界内に立ち入る時、一切気配遮断を施さなかったからだろう、僕が今日回収する予定のウラは、早くもこちらの存在を認識したようだ。

今までのウラとは違い、このウラは石を扉とした形で契約されているのではないらしい。どうやら土地そのものを扉としているようだ。

草の揺れる方向が同調する。広場の中央に、どの草も先端を向けていた。上空から見れば、草の曲線がきれいに円を描いているだろう。僕は妹をそつと地面に降ろし、背中のリュックサックから拘束具を取り出して構える。

それと同時に、先程まで太陽に照らされていた空が、急激に緋色に染まり始めた。

日が傾くにつれて影が草原を覆い、暗がりが生まれたところに白い巨体が現れるのを、僕は目にした。すっかり草原が影に包まれた後、そこにたたずむのは、今までとは比べ物にならないほど大きな、白く美しい鱗と澄んだ蒼の瞳を持つ蛇の姿をしたウラだった。

そのウラは黙ったまま僕を見つめている。妹は怯えていないかと不安になっている。横を見ると、怯えるどころか蛇を見て目

を輝いていた。その様子に安心する。妹は本当に、心の奥底からウラを愛しているのだ。それならばきっと、ウラに愛される資格を得ることが出来るだろう。大君の当主としてふさわしい能力を行使できる。

妹から目の前のウラへ視線を戻すと、僕は手にしていた拘束具を構えなおした。ずっしりとした重みが一気に腕にかかる。僕の腕が重みで動いたのに気が付いたのか、ウラの黄金の瞳が首輪へと向いた。

「すまないが、これをつけてくれ。妹のためだ。」

理解されるのかもわからないまま、ウラに向かって声をかける。

驚いたことに、僕の言葉に呼応してウラはその頭部を僕の腕の傍に近づけてきた。

その様子に、思わずゆがんだ笑みが浮かぶ。難攻不落と言われたウラでさえも、僕を愛する対象として認めたらし

い。目の前のウラは間違いなく、僕を完全に信用していた。

複雑な気持ちになりながら、そっと首輪を蛇の頭の上に捧げるように持つ。そして代々伝わってきたこのウラの名を呼び、回収を開始した。

「■■■■■」

蛇の瞳がゆっくりととじられる。ささやかな光と共に、首輪は解けるように白銀の輪へと形状を変え、ぴったりとウラの胴体に巻き付いた。

そしてウラもまた、今までと同じように光となる。僕の所に向かおうとするその光を、全ての回収と同じようにやんわりと制した。

無事妹の胸に光が吸収されたことを確認し、僕はほっと息をつく。回収は無事に済んだ。

ここまで来たら、やることはあと一つだけだった。

「行こうか」

「どこにいくの？」

「そうだな……お友達の所だよ」

妹に声をかけ、その手を引く。僕たちの目の前には、先程まで影も形もなかった祠がぼつんと立っていた。

この祠が、大君に伝わるものだ。僕の胸あたりまでしかないその祠に手を伸ばすと、確かに石に触れたはずの手が虚空を掴んだ。どうやら祠は見かけだけで、実質は別の場所へとつながる入り口の役割をしているらしい。まだ不思議そうな顔をしている妹に微笑みかけて、僕はそっと背をかがめながら祠の入り口をくぐった。

そこは本当に異世界という名にふさわしい場所だった。

入ってきた入り口から数十歩も歩かない場所に、台に乗せられた冠と思しきものがある。そこまでの通路と台の周りには白い道になっているが、それ以外の空間はすべて、この世のものとは思えないほど美しい星空で構成されていた。妹はここでも瞳を輝かせている。

だが、僕は驚くほど冷静になっていた。この空に広がっている星、そのどれ

もが、通常の世界には存在しない配列をしているからだ。この空は慣れ親しんだものではないと、本能か何かが頭の片隅でささやいている。確かに美しくはあるけれど、引き込まれてはいけない類のものなのだ、と。

妹の手を引き、そっと台まで近寄る。

冠は金属でできていた。細やかな装飾が施されているそれは、手のひらほどの直径しかないのにもかかわらず。重厚感と煌びやかさを放っている。

妹は夜空から、冠へと視線を移していた。本能的に惹かれるのだろう。この冠は何百年もの間大君家にとつての権威の象徴であり、彼らが愛しているウラとのつながりを最も強固に示してくれるものだったからだ。

妹の手が自然と台に伸びる。僕が誘導するまでもなく、そう妹が行動したこと少し寂しさを覚えながら、邪魔にならないように僕は台の傍から少し離れた。

冠に、妹の小さい手が触れた。途端に夜空の星々が強い輝きをもって妹を照ら

し始める。余りの眩しさに僕は思わず目を瞑る。

暫くして目を開けると、そこには最早幼い妹の姿はなかった。

代わりにいるのは、美しい夜空を従えるほどの美しさを持った一人の女性だった。黒い髪を腰まで伸ばし、大きく澄んだ蒼い瞳が僕を冷たく射抜いている。その相貌はどんな芸術作品の女性よりも美しく、誰もが心を奪われるような、素晴らしい美貌だった。

「お久しぶりですね、兄上。家族ごっこは楽しまれたようで。」

冷たい言葉が僕を貫く。その声はまぎれもなく、今まで共にいた妹のものだ。

「旅のこと、覚えていたんだね。体の退行の封印を施したから、記憶もそれに準ずるものかと思っていたけれど……」

「侮られては困りますね。あなたは確かに優秀なウラ遣いですが、人に対して術を行使するのは異様に下手ですから。」

あざけるように話す妹からは、僕に対するあたたかい気持ちは一切感じられない。

「残念でしたね。後継者争いで私を殺さなかったのが、あなたの最大の過ちです。家族の情など、そんな何の価値もないものに夢を見て冠を逃した挙句、自分がかけた封印まで解かれてしまうなんて」

実に滑稽だ、と妹は笑う。それに僕はぎこちない笑みを返した。笑っている以外にどうしていいかわからなかったからだ。

そう、当主争いの時、僕を殺そうとしたウラ遣いの中には、僕の大事な妹もいた。

僕と違って、妹は正常にウラ遣いとして生きていた。人に情を向けず、ウラを心から愛する。だから、僕がいくら妹に愛を注いでも、関心を請うても、妹は残酷なまでに無関心だった。

後継者争いのことを思い出す。あの時、最後に残ったのは僕と妹だった。

正確に言えば、そうなるように僕が仕組んだのだ。

僕は死ぬつもりだった。自分よりも妹の方が大事だったから、たとえ妹に何も返してもらえなくても、生きていてくれるだけで十分だった。

でも、大君の当主としてウラを回収するには、妹の力は到底足りなかった。僕が後継争いの時に、妹を護るための仕組みを作りすぎたことがよくなかったのだろう。妹はおそらく、成長のきつかけとなる重要な戦いを逃してしまった。他でもない僕のせいだ。

だからあの時、あと一撃で妹にとどめを刺せるといふ状態で僕は、彼女の体と記憶を封じ込める技を使った。僕がウラを集め、それを妹に譲渡することで、妹を無事当主として家に帰すために。

「何か言ったらどうです」
「そう、だね。僕は……」

上手く言葉が出てこない。幼い妹にはすんなり話しかけられていたのに、どうしてなのだろう。

「君は、楽しかったかい？僕との旅は、いったいどんな」

「ええもちろん！とても有意義でした！まさか最後のウラまで回収できるとは！」

うかがうように聞いた僕の言葉を遮るように妹は言う。とてもきれいな笑顔だったが、次の瞬間その表情は、美しいまま憎悪の形に変化した。

「本当に、本当に……！！だからあなたが昔から憎い！その実力を持っておいでよくも人の方が大切だと言えますね！」
絞り出すように恨みの言葉を吐き出しながら、妹は僕に力のこもった瞳を向ける。

「何の努力もしていないのに、ウラに愛されているながら……！あなたではない！私は、私こそが大君の当主として、ウラと親愛関係を結ぶんです！」

ああ、ウラ遣いとしてその主張はまっとうなものだ。

おかしいとしたら僕だ。そう分かっているはずなのに、これまでの人生で痛いほど自覚してきたはずなのに、勝手に心は妹の言葉に気付き、瞳は涙を流し始める。

「私はあなたからの愛なんて欲しくない！」

ああ。瞼を自由にふさげるように、耳も思い通りにふさげたらよかったのに。今の言葉は、一番聞きたくない言葉だ。

涙で視界がぼやける。一度袖でぬぐおうとして、腕が微塵も動かないことに気が付いた。

即座に足に力を入れる。だがこちらも無反応だ。僕はこの現象によく覚えがあった。

「停止の術。対象の体だけではなく、心と時間もその場につなぎとめる皇統術です。あなたでも冠の主たる私に逆らうこ

とはできない。そこで寝ていてください。この先ずっと、永遠に。」

妹が僕に踵を返す。一度も振り返らず立ち去るその姿から目をそらせずにいながら、僕は昔のことを思い出していた。

誰も話しかけてくれず、誰も僕のことを見てくれない。ウラ遣いとして生まれたのなら本能的に耐えられるはずのその無関心に傷ついて、疲れてしまった時のことだ。

小さな、本当に小さな手が僕の指を握ったのだった。

そう、生まれたばかりの僕の妹。唯一の同胎。

誰も僕を見ない、誰も僕を気にかけない。その中で唯一、赤子の妹は僕の指を握って笑ったのだ。

そして、僕はすべてを決断した。この先の人生を、妹のためだけに過ごそうと。時が経ち、ウラ遣いにふさわしく育った妹が、周囲と同じように無関心と不干涉の人になったとしても。あの一瞬、あの瞬間の幸福を心の糧にして、僕は。

唯一、妹と揃いの僕の青い瞳が閉じられる。涙を湛えたまま、自分の時が止まる。

いつか再び動き出したとき、最愛の家族と再会を願って、僕は永い眠りの始まりを甘受した。